

視点(1878)

(流通経済編)

S Cはライフスタイルの創造による消費の創出から生まれた流通産業!!

「鶏が先か卵が先か」の議論がありますが、流通業界で言い換えると「ライフスタイルの創造が消費を創出したのか？」あるいは「消費の創造がライフスタイルを創出したのか？」の考え方がありますが、私はS Cの発展プロセスの視点から見ると「ライフスタイルの創造が先にあり、そのライフスタイルの波及により消費が創出した」と考えています。すなわち、ライフスタイルの創出と消費の創出の間に「S Cの誕生」があります。

人類は、今から700万年前にアフリカのサバンナの「一点で誕生」し、その後世界に分散していきました。サバンナは密林が草原に変化し、今までの密林での猿の生活様式が一変し直立歩行するようになり、頭脳が進化し人類になりました。人類の誕生は、猿のライフスタイルの変化により起こり、人類は動物界の最強(?)の動物となりました。

流通業界の最強の業態であるS Cは、アメリカの小売業の売上高の61%、日本でも近未来に小売業の売上高の35~40%の売上高を獲得しようとしています。このS Cは、市場や商店街のように世界で必然的に同時発生して誕生し、かつ発展したのではなく、アメリカという国(一点)で誕生し、世界に拡大・波及した流通業態です。

S Cは次の3つの要因が備わると盛んに開発されるようになります。

- ①第1は「1人当たりのGDPが5,000ドルから10,000ドル」になること
- ②第2は「自動車の世帯保有数が30~50%」になること
- ③第3は「人口の大移動が起こる」(田舎から都市部へ、都市部から郊外への人口移動) こと

この3つの要因により「車社会に対応したライフスタイル」「中産階級の出現によるモダン消費に対応したライフスタイル」「郊外生活のファミリー(親と子供)に対応したライフスタイル」が生まれS Cが発展します。

まさに、アメリカの自国民の所得を高め、自国民の消費を促進させ、世界で唯一の経済現象の中でアメリカ独自のライフスタイルによりS Cは発展したのです。

一般的に1つの国の経済発展は「未開発国」→「発展途上国」→「新興国」(1人当たりGDP5,000~20,000ドル)→「中進国」(1人当たりGDP20,000~30,000ドル)→「先進国」(1人当たりGDP30,000~40,000ドル)→「超先進国」(1人当たりGDP40,000ドル以上)と進みます。

理論的にS C萌芽期は発展途上国から始まり、新興国で大量開発されます。そして、中進国や先進国ではS Cの存在は基軸業態となります。やがて、中進国や先進国の段階でモノ離れ現象が起こり、ポストモダン消費(デフレ&モノ・コトによる集客消費の時代)となり、やがてニューモダン消費において「適正成長とカチ(価値)による集客消費の時代」となります。S Cは、モノ離れが起こった後のポストモダン消費は、S Cのみならず小売業全体の消費がマイナスあるいは超低成長となりますが、その後、ポストモダン消費が終焉すると、今まで存在していなかったニーズ、あるいは今まで存在していたが新しい切り口のニーズが出現し、ニューモダン消費の時代となります。それゆえに、S Cは多様なニーズに対応してS C自体も業態が多様化します。このニューモダン消費時代は、S Cが多様化することにより性格の異なるS Cが1つのマーケットの中に多数成立するようになります。アメリカは人口単位で見ると1つのマーケット(100万人)の中にS Cが5ヶ所(S Cの成立基礎マーケット20万人)成立するのに対し、日本は1.6ヶ所(S Cの成立基礎マーケット60万人)となっているのは、アメリカの経済の成熟化が日本より先に進んでいるためです。現状レベルで日米を比較すると「アメリカは日本より3倍競争が激しい」と数値的に言うことができます。

いずれにしても、アメリカから起こった革新的なライフスタイルはS Cを育て、またS Cはアメリカのライフスタイルを進化させました。日本も2011年よりニューモダン消費の段階となり、今後は日本のライフスタイルが高度化し、多様化します。日本も「1つのマーケット(商圏)の中に、性格の異なるS Cが互いに切磋琢磨して、消費者への選択肢と新たな生活価値を高める時代」となります。

(株)ダイナミックマーケティング社⁺
代 表 六 車 秀 之